

親の誠の通い来るなり
恋しいと思う心も我ならで
古歌

聖句



第75卷467号

<http://canchiin.net> Email. shinsei@canchiin.net

平成29年7月15日
1・4・7・10月15日発行
発行所 真生同盟本部
〒105-0011
東京都港区芝公園
2-2-13 観智院
振替 00160-6-80674
電話 03(3431)1450
編集兼発行人
土屋光道
会費部
年額 2,000円
100円



華開いて
佛を見たてまつる

観智院第二十二世 真生同盟主幹 多聞院第三世

智徳心院青蓮社紅譽念阿華開見佛光道大和尚

平成二十九年六月二十六日 遷化 土屋光道上人 八十九歳

法話

楽宝寺 石田孝信

一言、ご挨拶を申し上げます。

ただ今は、土屋光道先生、土屋家並びに観智院、そして真生会にご縁の深い皆様と共に、先生がこれまで何百回、何千回と称えてこられた真生礼拝儀にて、お通夜のご回向を勤めさせて頂きました。お通夜に参列された時の大切な心得として、昔から二つの事が言われています。一つは故人のご生前をお偲び申し上げること、もう必要故人のご冥福をお祈り申し上げます。

先ほどのお勤めの時、皆様それ

それ先生とのこれまでのご縁を懐かしく思い出され、ご冥福を願うと共に感謝の思いの中に、お念仏されたことと拝察いたします。

土屋先生は、お手元のしおりに略年譜がありますように、観智院第二十二世住職、真生同盟主幹、多聞院第三世住職として寺門の興隆と念仏弘通に尽力してこられました。この間、浄土宗東京教区教化団長、大本山増上寺布教師会会長などの様々な要職を歴任され、また、大本山や全国の有縁寺院での五重相伝、授戒会の勸誡師、そして浄土宗各種講座の講師などを数多くお勤めになられ、お念仏の振興に全力で取り組んでこられました。一一取り上げたら切りがなほほどで、正に布教、伝道に命を捧げられた八十九年の尊いご生涯であります。

私ごとで恐縮ですが、先生に始めてご縁を頂いたのは、昭和49年、大正大学の三年生で受講する伝道学の授業であります。当時、先生

は四十六歳の頃で、眼光鋭く氣迫が全身に満ち、熱意と活力に溢れた講義をされ、一際輝いておられました。田舎者の私には近寄りたいたい畏敬の先生でありました。

ところが、有り難いことに毎年8月に開催される唐沢山阿弥陀寺での五日間の別時念仏会に、昭和62年に参加したことがご縁で、その後親しくご指導を頂けるようになります。大学生の頃から考えると、今日まで40数年にわたってご縁を頂きお世話になっております。そのような訳で、これまでのご恩に万分の一でも報いるようにというご配慮のもと、本日はこのような高い席、お導師の役目を拝命しておるものと心得ております。先ほど拝読しました真生礼拝儀は、お釈迦様が人生の目的と意味を明らかにされた成仏の教えを、法然上人がすべての人が平等に実現できる往生極楽を目的とする浄土宗に統一され、それを山崎弁栄上人が時代に即して阿弥陀仏が念

は四十六歳の頃で、眼光鋭く氣迫が全身に満ち、熱意と活力に溢れた講義をされ、一際輝いておられました。田舎者の私には近寄りたいたい畏敬の先生でありました。

仏者を救済する内容を具体的に述べられたもので、真生会では先生の師父観道上人が始められ、いつもお称えしているものです。

この法灯を若い僧侶に伝えなければならぬという責務が、先生の氣迫として現れ、私に畏敬の念を抱かせておられたと、今は理解しております。

次に、故人のご冥福をお祈りするということですが、先生は、ご生前にいつも念仏者は臨終の時、阿弥陀仏のご来迎を頂き、三種の愛心を離れ、極楽に往生させて頂けることを教えておられました。ご冥福の中におられることは疑う余地のないことでもあります。

ご来迎を頂く人は、それまでの心持ちが暗闇に光が射すように、ガラッと変わる、つまり救われるのです。その心境をあるお方は、「振り向けば、お陰を受けし、ことばかり」と表現しておられます。

89年のご生涯を振り返ると、略年譜に書ききれない多くの思い出

が走馬灯のように浮かぶことでしょう。辛いこと悲しいこと楽しいこと嬉しいこと、全てが貴重な体験として蘇ることでしょう。

真生主義を掲げ、念仏弘通に生涯を捧げることができたことに、感謝の思いをお持ちになっておられることと拝察いたします。本日ご参列の皆様お一人一人に、有難う、ありがとう。そして、しっかりお念仏して下さい。と声無き声を持って呼び掛けておられることでしょう。

誠に有名な残は尽きませんが、土屋先生の89年のご生涯をお偲び申し上げ、数々のご功績を讃え、感謝の思いを添えて、十念を称えさせて頂きます。

観智院第二十二世、真生同盟主幹、多聞院第三世

新円寂智徳心院青蓮社紅譽上人
念阿華開見佛光大和尚
莊嚴浄土報恩謝徳 同称十念

(前青森教区教区長)

通夜差定

六月三十日(金) 十九時～

『眞生礼拝儀』

- 一、念仏一会
- 一、導師式衆入堂
- 一、開式
- 一、三礼
- 一、帰命章
- 一、如来光明歎徳章
- 一、勸請章



一、光明撰取の文

一、念佛三昧

一、回向

一、総回向の文

一、同称十念

一、至心に発願す

一、三礼

一、導師法話

石田孝信上人

(青森教区 楽宝寺住職)

一、導師式衆退堂

一、遺弟挨拶

信譽正道 (観智院二十三世)

密葬儀差定

七月一日(土) 十時～

一、開式

一、念仏一会

一、導師式衆入堂

一、香偈

一、三宝礼

一、三奉請

一、懺悔偈 十念

一、歎仏偈

一、香語

一、開経偈

一、阿弥陀経

一、御回向

一、心浄偈 十念

一、撰益文

一、念仏一会

一、御回向

一、総回向偈 十念

一、総願偈

一、三身礼

一、還相回向偈

一、導師式衆退堂

一、光道上人法話

DVD「継承と革新」より

香語

常照院 野村恒道

それ謹みて思う浄土の中には
極楽を最とし、諸佛の中には弥陀
を本とす彼の佛は是れ浄佛国土
の主諸佛慈悲の体なり、然りとい
えども法独り弘まらず、人を待ち
て興隆す人自ら進まず、法に依つ
て開悟す

恭しく惟みるに観智院第二十二



世眞生同盟主幹多聞院第三世土
屋光道上人智徳心院青蓮社紅譽
念阿華開見佛光道大和尚去んぬ
る二十六日忽然として弥陀来迎
の雲に乗じて、質を紫金蓮台に托
す、世寿八十有九歳まさに痛惜の
念溢れて追慕の響きを残す、

上人は、昭和三年二月二日芝山
内の多聞室におきて、土屋観道美
和子内室の間に生を享け、長じて
東京大学文学部への入学を果たし、

更に昭和三十五年同大学院宗教学史学科を修了、宗教学の真髄を研鑽さるる

その後関東学院大学、明治学院大学においても教鞭を振るわれ特に大正大学伝道学の教室では、若き宗侶の育成に、その熱き情熱を傾注さるる

その間、東大文学部助手の任官を努め、昭和三十五年多聞院住職更に昭和四十四年観智院第二十二世の法統を継ぐ、眞生同盟主幹の推挙をも拝受し法友と共に只ひたすら念佛弘通第一線の道を邁進す

宗内におきては、東京教区教化団長布教研究所主任総合研究所客員教授等を歴任、後進布教師に、布教の現代あるべき範を示さるる

加うるに大本山増上寺の布教師会会長、教監の任にありては数多の道場、講習の場におきてその先達としての指導力を遺憾なく發揮され感銘の声全国に及ぶ

晩年に至りても尚研究主任の座にあり、選択集奉載八百年記念事

業『現代と念佛』を刊行、読者に多くの裨益をもたらし、自著及びメディアにおける『念佛とは何か』を広く大衆に語り続けたその功績は誠に大なるもの有

平成十九年伴侶悦子御内室を見送りし後も、その大いなる心痛を凌駕し、昨年法嗣正道上人京都清浄華院唱導師成満の折、米寿の祝賀の晴れやかな笑みは、人々の記憶に新しきところと言えり

然るに過日四大俄に不調を来し安祥として往詣楽邦の人となるまさに布教界の巨星墜つ誠に惜しみて余りあるものあり、惜別の言辞止まるところを知らず

この上は願わくば行願速やかに円満し弥陀安養界に到りて忽ちに穢国に還来して、人天を度されることを

平成二十九年七月一日

芝山内常照院

清譽恒道

(東京教区芝組顧問)



表葬儀謝辞

法嗣 土屋正道

局の諸上人、総大本山執事長諸上人、御念仏お焼香いただき、こころより御礼申し上げます。

また、ご弔辞を賜りました総本山知恩院門跡 伊藤唯眞猊下ご名代 北川一有執事長、浄土宗宗務総長 豊岡鎌尔上人、観智院檀信徒総代 谷口英夫さま、眞生同盟道友代表 森島米史郎さま 暖かくも格調高いお言葉をいただき感謝申し上げます。その他、浄土宗東京教区役職、増上寺役職の諸上人はじめ、全国より大勢の方々にご参列賜り誠にありがとうございました。

光道上人は、6月26日朝、一人で風呂の浴槽で倒れ、心臓マッサージ人工呼吸をしながら東京女子医大病院に救急車で搬送しましたが、10時8分虚血性心不全で89歳の生涯を閉じました。

晩年は、何度も肺炎で入院しましたがそのたびに退院。不死鳥のごとく復活してまいりました。

3月の彼岸法要では法話を務め、

本日は、師父土屋光道表葬儀に際し、お導師をお勤め賜りました大本山増上寺法主 八木季生大僧正 台下、式衆をお勤めいただきました芝山内寺院諸大徳。御陪席賜りました大本山清浄華院法主 眞野龍海 大僧正台下、大本山善導寺法主 阿川文正大僧正台下、大本山光明寺法主 柴田哲彦大僧正台下、浄土宗内

毎月4日、19日の眞生同盟念仏会では導師を勤め6月19日もいつも通り力強く話しておりました。実は26日の夜中3時過ぎに、会話したのが最後になりました。

夜更かししていた私に「何時だと思ってるんだ。もう3時ですよ。早く寝なさい」

いつまでたつても子供のことを心配する優しい父親であり、念仏修養の先達でした。

ご存知の方もいらつしゃると存じますが、私の母悦子が逝去して丸10年。妻や子供とは家庭内別居で、師父と二人暮らし。食事洗濯をし、寝起きを共にしてまいりました。理知的ですが寂しがりな師父は母を愛し頼りにしておりましたから落ち込みは激しく、みなさまにご心配をおかけいたしました。しかし念仏信仰が彼を復活させ、人の痛みに寄り添う円熟した老境を獲得したように思います。師父は繰り返し「臨終の用心」を説いておりました。

「我々は、生が続いた先に死があるように思っている。死神はずっと先にいて私たちが近づくと持っている、と思っている。」

しかし、そうではない。生は大海原に浮かんだ小舟のようなものだ。波がかぶって小舟がひっくり返ったところが死だぞ。いいか、

死神はいつもすぐ後ろにいて、隙あらば後ろざまに引き倒そうとしている。だから今の念仏は臨終の念仏と思わねばならない。」

彼の突然の死はそのことを改めて私にそのことを思い知らせてくれました。

しかし死んだら終わりではありません。

「永遠の生命と、無限の向上」を信じ、

「死ぬまで元気。死んでも元気」と言っておりましたから間違いなく極楽浄土で修養に励んでいることでしょう。

やり残したことがない、充実した人生だったと思います。その人

生に深く関わってくださった皆様に心から感謝申し上げます。

バトンは私共に託されましたが、一番の相談相手がいなくなってしまうことに戸惑っております。

明年は、観智院は開創430年、祖父で眞生同盟初代主幹観道上人50回忌、再来年は観道の師匠、山崎弁栄上人100回忌、観智院の名前の由来観智国師400回忌に当たります。

師父の教えを守り、念仏精進してまいります。どうか今後とも、御支えくださいますようお願い申し上げます。

本日は、まことにありがとうございます。南無阿弥陀仏 ございました。

私の生死観

土屋 観道

とをいとい恐れたからであった。その結果が遂に道を求め、入信して今日に到った。

(2) 私は小供の頃、いくつかの葬式を見、又墓ほりの時死人のふらんしたみにくさを見たことがあり、殊に八歳の頃、野口某という女の死がいを見た時のいやな感じがまざまざと思い出されて悩んだ。

二 (3) とところがこうした悲しみも私の入信と共に、喜びと変わった。この死は必ずしも悲しむべきものでないことになった。それは大自然を通して宇宙の大生命にふれたからである。私は忽然として大歓喜地に入った。

一 (4) その時の喜びに私は「喜べ樂しめ、われらは天国の裡にあり」と観じた。あらゆる宇宙の現象を観るに、諸行は無常なり、諸法は無我なりであるとは仏教の教えであるが、一方にまた三宝

(1) 私は二〇歳の頃、生死問題で悩んでいた。それも自分がいつ

かは、死なねばなぬということに気づいて、その死ぬというこ

は常住なり、弥陀の浄土は建立常然なりという。極楽を無為涅槃といひ、常楽我浄の世界という。私の入信は主としてこの教がもとを為すかに見える。

(5) 生死を厭うて、生死を越えたものといつてもよい。生死の中に仏あれば生死なしと。私は初めは生死を嫌つて之をいとい、浄土を欣つて、生死を出たのであるが、それは大自然を観察することに

よつて、大自然の宏大無辺なるに驚き、時間的には無始無終、空間的には廣大無辺、而も万象のよつて来るところ、又一切万有の相互関係や、万象と宇宙、宇宙と人生、それが悉く自分と関係することを観察した。

(6) 宇宙には無限の力と法則と恵みとが充ち満ちていることに気づき、その裡に私が活かされて生きていくことを知った。

(7) 三 この知は単なる知でなく、正

に生命の本源を宇宙の本体に見し万有もこれ皆この生命より湧出(發生)せることを実感したによる。之ぞ不生の生、永遠の生命である。この自覚、この信仰、之が私の入信の始めであつた。

(8) 一切の諸仏も此の生命より出て、一切の万有もこの生命の現れに外ならぬ、万物同根とはこのことである。

之を如来といい、如来とすれば、私も如来の御子であり、如来の分身である。

(9) それからの私は之を中心として今日に到つてゐる。あらゆる仏教も之を中心とし、之を体験として観ずれば、一切は悉く解されないものはない。

(10) 四 仏教に宗旨宗派の別は多いが、その大綱神髓を捕らえ来たれば、この根本を離れて仏教はない。之が私の今日である。

この見地に立つて、私の人生を観ずれば、いつも私は第一に宇宙と人生との関係を視る。そして宇宙と人生とにおいて、(一) われわれは宇宙の現れ、宇宙生命の本源より来る。我と宇宙とは一体なり、不二なり、一如なりと。

そう考へるとき、私は自己の生命の不死なるを信ずる。(二) 私は宇宙生命の表現なれば、宇宙と共に不滅である。人生としての一生は、生の現れ、死は帰滅として生死共に宇宙生命の本源に任すのである。

(三) 我は宇宙の本源より来たり、われは宇宙の本源に帰る。是れが私の生死観である。

(11) 五 かくて、われわれは宇宙の本源よりこの世に生まれたのである。従つて又死すれば宇宙の本源に帰る。死は帰するが如しと故人が云つたが全くその通りで

ある。生命のふるさと、生命の親許に帰るのである。

(12) 否、一步を進めて人生を達観すれば、人間の一生は生死そのままが宇宙の現象である。宇宙生命の表現であり、生死そのままが宇宙生命の活動であつて、われわれわれの身心は宇宙生命の分身である。従つてわれわれ個人の生命もその実は宇宙生命そのままの活動である。

(13) ここにおいて、われわれはいつも即今の人生として、全身全霊を以て事物に即して、最善の努力に生きればよい。

(14) 宇宙全体を神とすればわれは宇宙神の子、神の分身である。従つて、仏教ではこれを仏子といつてゐる。神の外にわれなきが故に、神の心を心として生きるとき、われそのままが神の生活である。私は之を真生といつてゐる。

(15) 神を中心とすれば我は神の子であり、神であり、すべての人

類は神の子であり、神である。
又神としての兄弟姉妹である。

七〇歳（一九五七）

昭和三二・一一・八

御慈悲のたより

山崎弁栄

生者必滅は人界のならない、会者
定離は浮き世のおきてなれば、大
聖釈迦如来さえも、ついに涅槃の
雲に隠れ、紫摩金色の御身もまた、
梅檀の煙と消えはてぬ。げに世の
無常のさま、されば朝に咲ける花、
夕べの嵐に散りやすく、夜にむす
ぶ露は、朝日の前に消えはてぬ。
げに頼みがたきは、世のさまなれ。
ただただ頼むべきは、慈悲の親
さまよりほかに、たよるかたなく
候。悲しみ深ければ深きほど、慈
悲の親さまをふかくふかく御頼み
なさるるに願わしく候。

思し召したまうてましますならぬ。
昔、和泉式部はひとりの愛子、
小式部の内待に先だたれ、何とな
く悲しみのやる瀬なく、なげきて、
もろともに苔の下には朽ちずして
ひとり憂きめを見るぞ悲しき
と詠まれた。とても死ぬならば、
もろともに死ぬがましである。ひ
とり残されて、憂き目を見ること
の、うたてさよ、と堪えぬばかり
に悲しまれたが、性空上人の教え
にもとづきてのちに、弥陀の本願
に乗じて、念仏三昧の信念を一つ
にして、ついに如来の慈悲の光明
に照護せられ、光明に触れてから
は、従来の心の闇も晴れて、心も
生まれかわるほどにありがたき心
となりて、光明の日ぐらしになら
れた。その頃の歌に、
ゆめの世に
あだにはかなき身を知れと
教えて帰る子はほとけなり
と。

よく自分が信仰の目を覚まして、
真実に如来のお慈悲がわかるよう
になってかえりみれば、自身が
まったく真の信心もあらわれ、光
明の日ぐらしになることができた
のも、そのもととはといえば、わが
子が知識となりてわれをみちびき
てくれてくれたから、まったく信仰
に入ったのである。してみれば、
わが子とはいうものの、かの小式
部は如来のお使いとして、われを
信仰に入れてくれたのであると。
これは昔の話のようなれども、
やはり先立たれたる一子は、諸君
を永い永い未来の一大事の安心に
みちびくように、如来様からの御
使いでありますから、どうぞどう
ぞ一心に慈悲の親さまを頼み参せ、
一心に念仏を称えて光陰に接する
よう、お勧め申します。皆様のお
心が、如来の御慈悲の光に接して、
まったくあの子は如来さまのお使
いであると信心の眼を開いた時、
一子も慈悲のふところに抱かれた
時なのです。

人間磁石

中野善英

磁石は横にして置いても、堅に
して置いても紙の下に隠して置い
ても、紙の下から惹きつける。
そんな力をドコに持って居るか。
磁極から磁力を得て自分のカラ
ダ全体を磁力化したからです。
人間も自分を如来化したら天地の
凡ての人を惹きつける力がある。
キリストも釈尊も「人間磁石」で
あった

不断修行

中野善英

コチコチ コチコチ
明けても暮れてもコチコチ
人が見て居ても見て居らぬでも一
つ処で、年中変らず
休みもせず、腹も立てずに
同じことをコチコチ コチコチ
飽かずに、くたびれずに
馬鹿になって、阿呆になって一行
三昧コチコチコチコチ

それで初めて「信用」がつく。尊ばれるのです。

「自己の責任」を一意貫行する者が活きた仏です。

増上寺二十四時間

不断念仏会を終えて

江東区 田中典幸

例年は5月の中旬もしくは下旬に行われる増上寺不断念仏会であったが、今年は連休の最終日、6日から7日の日程で行われた。

例年よりも準備期間が短かったものの、今回はボランティアスタッフの一人ひとりが自らの力を最大限に發揮し、協力し合って成功した念仏会であったと熱い気持ちになった。

会場設営も連休中のため、運営側も人員が確保できない中であっても参加し、作業中に自らの意見を出し合い作業して下さった方。ご不幸があったにも関わらず、受付や通訳として活躍して下さった方。長時間、運営側と参加者を結

びつけるべく、調整を務めて下さった方々など、ボランティアの方々が一人欠けても潤滑に運営できなかったであろう。優しく正確な対応のひとつひとつに心をうたれた。

念仏に出合ったことの喜び、そして念仏を続けていくことの楽しさをお互いに共有、共感しあい、仏様のお力で生きていることに感謝する。難難辛苦に思い悩む自己のまま念仏を実践している姿は、まさしく大乘仏教の根本精神である「自利・利他」であると思えた。

みんなで本願という船にのって、誰ひとり残さずに幸せにさせていただく、と改めて学ばせて頂いた。浄土宗の日常修行の偈文の1つ

に「撰益文」がある。『光明遍照十方世界 念仏衆生 撰取不捨』阿弥陀様の光は、あまねく十方を照らして、念仏するすべての者を、一人も漏れることなく極楽浄土へ導いて下さるという意味である。

参加者も、ボランティアスタッフも、運営側もすべての方が輝いていて、この姿はきつと阿弥陀様をはじめ様々な仏様に届いていると信じている。

初めはいち参加者でありながらも自らが一步を踏み出し、業務を実践している皆様の御姿はまさに菩薩であった。

来年も増上寺で共に作業し、念仏できる事を今から楽しみにしている。

念仏中継場所

五月六日(土)

◆十三時

ラハイナ浄土院 (ハワイ)

原照上人

◆十四時

ココア浄土院 (ハワイ)

石川広宣上人

◆十五時

清浄華院 (京都)

◆十六時

スタッフオードシャー (イギ



スクリーンにて各国の中継地とつなぐ



結 願



5月6日～7日 第13回24時間不断念仏会 増上寺光撰殿大広間

リス) アンドリユー氏

◆十七時

林海庵(多摩市)

笠原泰淳上人

◆十九時

マルヴェーン(イギリス)

アマダトラスト

◆二十時

阿弥陀寺(オーストラリア)

ウイルソン哲雄上人

◆二十一時

菩提学苑(台湾)

開明法師

◆二十二時

普陀精舎(台湾)

◆二十三時

ヨーロッパ仏教センター(フランス)

高僧光隆上人

五月七日(日)

◆〇時

サンアントニオ(アメリカ)

エリック氏

◆五時

イビウーナ日伯寺(ブラジル)

◆六時

ハレ(ドイツ)

ベアータ氏

クリチバ日伯寺(ブラジル)

大江田晃義上人

◆七時

モントリオール

豊田悠貴氏

◆八時

長昌寺(大分)

今井英之上人

◆九時

観智院(東京)

◆十時

靈妙庵(韓国)

六時礼讃別時念仏会

所沢市 酒井正空

六月九日(金) 十八半より十日

(土) 十八時にかけて六時礼讃別

時念仏会を厳修致しました。観智

院では初夜礼讃から始め、中夜、

後夜、晨朝、日中、日没の礼讃を

規定通りの時間帯に勤めます。



本年は本堂に四天王をお迎えして、まず道場洒水は私が、道場散華は諸澤上人が各々勤めました。続いて毎年導師をお願いしている古田幸隆上人と共に皆で『別時念佛三昧八誓』をお唱えし、「但信口称念仏」「結婦一行三昧」に依る如来の實在と本願の救済を確信する意識を高め、念仏一会の後、礼讃へと入っていきましました。

このように礼讃を唱える時のみならず、様々な所作においても如来様を中心にして一日を自己修養のために費やすことがこの六時礼讃別時念仏会の特徴です。

礼讃では僧俗一体となって散華行道に依って如来様を讃歎供養し、各々が如来様と向き合って如来様と親近して、念仏三昧の修練をいたしました。そして「日没礼讃」のお唱えをもって日常生活における罪業を如来様の御前で礼拝・懺悔して、六時のお勤めを終え、最後は結願法要を修して、一日を通して行じた「念仏」「礼讃」の功德を回向して成満となりました。

六時礼讃参加者

六月九日(金)～十日(土)

- 長野市 古田 幸隆
- 港区 土屋 光道
- 江戸川区 並木 かおり
- 杉並区 局 洋次郎
- 我孫子市 金丸 昌弘
- 中野区 小島 清一



- 柏市 小岩井 香予子
- 名古屋市 大橋 舞
- 世田谷区 鄭 文
- 市川市 服部 道子
- 西東京市 有田 紀男
- 板橋区 中村 立道
- 武蔵村山市 諸澤 正俊
- 所沢市 酒井 正空
- 江東区 田中 典幸
- 横浜市 西浦 珠未
- 大和市 邱 玉燕

- 江戸川区 中村 和代
- 倉吉市 工藤 西華
- 横浜市 張 慧美
- 板橋区 金子 明生
- 港区 土屋 正道
- 港区 土屋 由恵
- 港区 土屋 遥
- 港区 土屋 法道

鎌倉大仏 月夜の別時念仏会 ご案内

日時

十月六日(金) 十八時三十分～

雨天でも回廊にて決行

正面右わきの通路奥

客殿受付に集合(夕食をすませ

て)

①十八時三十分～二十一時半

②二十二時～六時三十分

客殿にて随時仮眠も可能です。

翌朝、六時半すぎに解散

途中退出も自由

場所

鎌倉高徳院境内(鎌倉駅よりタクシーで十分)

鎌倉市長谷二丁目二八

〇四六七―二二一〇七〇三

会費

四〇〇〇円(本尊前夜食代込)

服装

僧侶の方は黒衣・如法衣

一般の方は自由(運動靴が適)

持ち物

礼誦法、懐中電灯、雨具、防寒具

※途中退室はご自由ですが、途中入場はなるべくご遠慮下さい。

※御出席の方は十月四(水)日

までにお知らせ下さい。

スケジュール

第一部

十八時半 開白法要念仏

二十時 御法話休憩

二十一時半 木魚念仏終了

※近隣への配慮により、これ以後は、礼拝・礼讃を主として

念仏

第二部

二十二時 礼拝

二十年時 休憩夜食

〇時 十夜法要(中夜礼讃)

一時半 休憩

二時 仏名会(礼拝)

三時半 休憩

四時 別時勤行式(後夜礼讃)

五時 十二光礼拝

六時 結願法要念仏

五月十三日(金) 十一時

十五日(日) 十五時

場所

観智院

行事

念仏・法話・座談

法要

十五日六時増上寺参拝大殿大念仏

十五日十三時半(

懇親会

(御回向お申し込み下さい)

真生同盟本部大会

ご案内

十五日十五時

会費

一万五千元

※日帰り五千円懇親会五千元

大悲真生阿弥陀仏が忙しいアナ

タのお越しをお待ちしています。

如来様と一つになる実感を得るま

で策勵いたしましょう。 合掌

岡村康久さま逝去

平成二十九年三月十七日享年九

十六歳にて、岡村康久さまが逝去

されました。観道上人に帰依され

たご両親の影響で、10代から専心

念仏に打ち込まれました。農学校

教員として生徒の育成に尽力され

るかたわら、釣りやテニス、スキー

で爽やかな汗を流し、定年後にス

キー指導員の資格を取り毎冬指導

に出向かれました。柏崎真生会支

部長を長らくお務めいただき現在

修養会でつかわせたいただいてい

る浄興寺別院も岡村さまのご尽力

によるものです。謹んで哀悼の意

を評します。

柏崎修養会参加者

五月二十六日(金)・二十七日(土)

東京 土屋正道

土屋由恵

千葉 服部道子

高橋教正

高橋豊子

岡村明子

与口勝郎

柏崎

高橋

高橋

高橋

高橋

高橋



柏崎修養会参加者

五月二十六日(金)・二十七日(土)

東京 土屋正道

土屋由恵

千葉 服部道子

高橋教正

高橋豊子

岡村明子

与口勝郎

柏崎

高橋

高橋

高橋

高橋

高橋

高橋

高橋

高橋

高橋

高橋

高橋

高橋

高橋

高橋

京都の中心で、仏の名を称える 第6回 24時間不断念仏会



- 24時間、ノンストップの念仏会です。ただひたすら「なむあみだぶつ」と称え続けます。途中で五体投地や行道(仏様の周りを巡る)による念仏も加えます。
- 途中からの参加、中途での退場、中抜け、30分参加だってOKです。お勤め帰りや観光のついででも歓迎します。真夜中だって構いません。会場内には必ず誰かがいて、あなたと祈りをともにします。
- 疲れたら控室で休みましょう(湯茶はどなたも随時摂れます)。
- 長時間(概ね6時間以上)参加者で希望の方には修養証(参加証)を発行します。
- 数珠や輪袈裟をお持ちでしたらぜひお持ち下さい(宗旨不問)。僧侶の方であれば黒衣・如法衣にて。

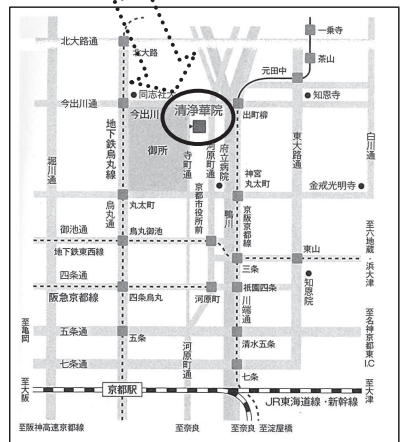
写経・写仏道場
もあります。

インターネットで世界同時双方向
念仏中継。中継拠点エントリー歓迎!
浄土宗ホームページでも見られます

日時:平成29年9月30日(土)13:00~10月1日(日)13:00
会場:浄土宗大本山清浄華院
(京都市上京区寺町通広小路上ル北之辺町 395 京都御所東側 寺町通沿い)

会費:5,000円
但し、ショート参加(概ね2時間まで)ワンコイン
燈籠:ご志納 2,000円(ミニ燈籠500円は当日申込み)
※ご来場でない方の献燈料は、現金書留か
郵便振替(00130-4-705649 観智院)で事務局にご送金下さい。

会場略地図



日程(変更する場合あり)

9月30日(土)	10月1日(日)
12:15 受付開始	0:00~1:00 夜食(希望者はこの時間内に)
12:30 オリエンテーション	1:00 礼拝 or 行道
12:45 開白	5:00 礼拝 or 行道
13:00 不断念仏開始	6:00 大殿朝勤行(希望者)24時間念仏は続行
以降24時間ノンストップ	7:00~8:00 朝食(希望者はこの時間内に)
17:00 礼拝 or 行道	9:00 礼拝 or 行道
18:00~19:00 夕食(希望者はこの時間内に)	13:00 結願(終了にあたり感謝と回向)
21:00 礼拝 or 行道	14:00 解散

申込先:24時間不断念仏会 事務局
〒105-0011 東京都港区芝公園2-2-13 観智院内
<http://www.canchiin.net/> FAX:03-3431-7807 本行事特設E-mail:nenbutsu24@hotmail.co.jp

【申込書】 私は9月30日~10月1日に開催の不断念仏会に下記の内容で参加を申し込みます。 _____ 月 _____ 日

お名前(ふりがな)		
連絡先	電話:	E-mail
おところ	〒	
参加予定	_____月_____日_____時_____分から_____月_____日_____時_____分まで(当日予定変更可)	
修養証	要 ・ 不要	(6時間以上参加の方は、どちらかに○をお付け下さい)
燈籠 (希望者のみ記入)	願意(世界平和、震災復興祈願、自家先祖供養など随意)	

※ご記入の上、上記申込先までFAXか郵送にてお送り下さい。E-mailの場合は、件名を24時間申込として、上記事項を本文に記載下さい。